

C日程入試 未修者論文試験「出題の趣旨と解説」

ロースクールでの学習は、大量の情報を限られた時間内に消化しなければならない点でも、また常に競争的環境にあり学習到達度について評価がなされる点でも、非常に厳しいものです。ロースクールで3年間を過ごして、司法試験にチャレンジしていくためには、各自にあった合理的な学習方法について考え、工夫し、確立する力が必要になります。そこで、そういった学習方法論の工夫へのヒントにもなるように、教育心理学者である佐伯胖氏の『『わかる』ということの意味』から出題しました。

第1問

出題意図は、論理的文章についての理解力と、論理の構築能力を問う点にあります。

本問では「メノンのパラドックス」への解答が求められていますが、「パラドックス」とは矛盾（ジレンマ）とか逆説のことですから、何と何がどう対立しているのかを分析したうえで、その対立について、こう考えると実は対立しないことをうまく説明しなければなりません。論理力と表現力を問うために出題をしました。

そもそものジレンマは、①真実を知らなければ、そもそも新しく正しいことを「知る」ことができないのではないかと、②逆に真実を知っていれば、そもそも新しく物事を「知る」必要はなく、またもともとわかっていたわけだからあらためて「知る」ことはないではないかと、という矛盾です。

この矛盾を解くためには、そもそも筆者がいう「知る」「わかる」ということは、既存の知識と新しい知識とが経験を通じて結びついて、「ああ、そういうことだったのか」と「わかる」ことを意味することをあなたが「わかる」必要があります。

たとえば $3 \div 2 = 1.5$ という小数がわからなかった子どもが、あるとき、3個のみかんを2人の人に1個と半分ずつ分けたときに、ああ、そういうことだったのか、とわかるようなことを言います。3÷2を抽象的にはわからなくても、経験としては3を2で割った経験があったわけで、その経験と結びついたときに1.5が正しいことを「知る」ことができたのです。

その意味では、経験的に得た正しい知識（1個のみかんを半分に分けることができること）があるからこそ、その知識に照らして正しいと判断できる新しい知識（小数の0.5）を積み上げることができます。つまり①については、私たちは「真実の一部」を既存の知識として知っているから、新しく正しいことを「わかる」ことができるのだと解答することになります。

次に、②については、確かに神様のように全能の知識をもっていれば新しく何かを積み上げて学習することはありえないでしょうが、人は、「すべての真実」を知っていることはありません。人は真実の一部を知っているにすぎず、だからこそ、その一部のうえに新しい知識を積み上げてより全体的な真実に近づく必要があります、そこに新たな「学び」の喜

びがあるわけです。つまり②については、人間は「真実の一部しか知らない」から新しい知識が必要になることを指摘する必要があります。

こうして①と②のジレンマは、真実が正しい事実の積み重ねによって迫っていく無限の対象であることと、「わかる」ということがその積み重ねの過程において、既存の知識と新たな知識とを経験を通じて架橋し関連づける活動であることを指摘することで、矛盾ではなくなるのです。傍線部 (A) を読めば、①と②の両方について解答が求められていることがわかるはずです。

採点の結果ですが、①の知識の積み重ねが「わかる」ということだ、という点については何とか指摘されていました。しかし、②の「真実の無限性、多層性」については明確な言及がなく、どこがジレンマになっており、どうすればその矛盾が解けるのかという観点がきちんと示されていませんでした。

その原因は、筆者がいう「わかる」ということを、まさに自分の体験と結びつけて本当に「わかって」いなかったからではないかと思います。

解答例

真実を知るとは、既存の知識を積み重ね、知識と知識の関連性、積み重ねの中で、さらに新たな疑問にぶつかり、そのためにさらに真実を求めていくという永続的なプロセスである。私たちは、自らの経験を通じて、真実の一部としての正しい知識をもっており、その知識と照らし合わせて、新しく正しい知識を経験的に得ていくことができる。しかし、私たちが得た知識の体系は、真実の「一部」にすぎないから、常により広くて深い真実を求めて、新しい知識を得ることが必要であり、可能である。こう考えることでメノンのパラドックスは矛盾ではなくなる。

第2問

第2問は、学校が (B) (大人から子どもへの一方的な)「標準的な知識や技能を確実に伝達するところ」という考え方と、学校が (C) (大人と子どもの相互間の)「わかりあいとしての文化的実践の場」という考え方のいずれを支持するかについて、根拠をもって自説を展開できるか、見ようとするものです。出題意図としては、ロースクールで必要となる、①自説の提示、②自説の根拠、③他の考え方の批判的検討という思考プロセスをとれるかどうか、またそれを論理的に記述できるかどうかを試そうとしたものです。

(B) の考え方は、伝統的な義務教育の学校の考え方であり、産業社会に必要な読み書きそろばんができる基礎人材を大量に生み出すことに有効な考え方といえることができます。

それに対して (C) の考え方は、筆者の考え方であり、やや理解するのは難しかったかもしれません。

ヒントは、筆者が (B) の考え方を「知識の大量生産技術にすぎない」と批判し、学校

をよりよいものを発見し、共有し、生産し、広めるという文化的創造の場だと位置付けている点にあります。また、文化的実践に対して大人が子どもに参加を呼び掛ける場が学校であるとしている点です。

実例が省略されているので、理解しづらかったかもしれませんが、絵を描くとか、音楽を演奏するなどの芸術活動で考えてみれば、絵画や音楽の技術を一方的に教えるのではなく、一緒に楽しみ、場合によっては教師が子どもから学ぶ（教師より才能のある子はいくらでもいます）場としての学校を考えており、「参加」「子どもの主体性や対等性」「創造性」をより重視していることがわかるでしょう。

若い世代は、「総合学習」とか「ゆとり学習」といった経験を持っていることと思いますので、それに結びつけてみてはどうでしょうか。大量生産では世界の競争に追いつかなくなり、グローバル化が進んだ現代では、より最先端の新しい科学技術や芸術の「創作力」といった創造性が求められたり、異なった価値観のぶつかり合いに対する柔軟な対応力が問われたりします。そういった能力を伸ばすには、一方的な知識の伝達では不十分だと考えられるようになってきているのです。

ただし、「ゆとり教育」が厳しい批判を浴びて再構成されたように、「わかりあいの場」としてどのような教育をすべきかについてはさまざまな意見がありますし、対立があります。実際の受験競争の場では、知識の伝達型教育の方が効果的な面も否定できませんから、父母もまた後者の学校観のよき理解者とは必ずしも言えません。

仮に皆さんが（B）の考え方をとるにしても、（C）の考えを理解し、批判する必要があります。

ところが、採点してみると、（C）の考え方についての理解が十分になされておらず、単に（B）の考え方を自分の主観的な意見に基づいて支持するだけの答案になっていました。そのため、（B）を支持する根拠も筆者の批判を無視した薄っぺらな記述になっていましたし、（C）への批判的検討はなされていませんでした。形式的に論拠は書かれているものの、全体として説得力が足りませんでした。

ロースクールでは、判例・通説とそれに対する有力説や少数説の対立が数多く出てきます。その場合、それぞれの説の根拠をまずは理解することが求められます。その根拠を理解しないまま、一方的にある説を（うのみないしは自分の主観によって）支持したとしても、説得力を持ちません。

解答例

私は文化的実践への参加と分かり合いの場としての学校観（C）を支持する。

現代社会は、脱工業化社会であり、そこでは、新しい科学技術や芸術のみならず、急速に流動する社会に対応して、制度や商品やサービスを常時見直し、変更していくための、創造力や柔軟性が求められる。またグローバル化の中で、異なる価値観の衝突を耐え、それを理解し、受け止め、折り合いをつけていく文化的柔軟性も必要である。

そうだとすれば、教育においても、より創造的な能力を伸ばすために、(C)の学校観に沿って、一方的な知識伝授の教育から、大人が子どもの創造性を伸ばしていけるように、子どもに主体的に文化的実践（実験、実習等の活動を含む）を行わせ、また多様な文化や価値を分かり合う経験を積むことができる参加型の教育が強く求められると私は考えるからである。

確かに、基礎となる学力（読み書きそろばん）については、(B)の考え方も一部当てはまる。それらについては、画一的効率的に訓練することが適している面があるからである。

しかし、基礎学力を養うことは前提としつつも、知識や技能には限りがないから、効率的伝達を重視すると、結局、単なる詰めこみ教育になってしまう。思考力、創造力やリーダーシップなどを伸ばしていくためには、知識伝達型教育には限界がある。

よって、私は(C)の学校観、教育観を支持するものである。